

もみ殻肥料化で研究会

産学連携組織 バイオ産業活性化 メンバーら20者

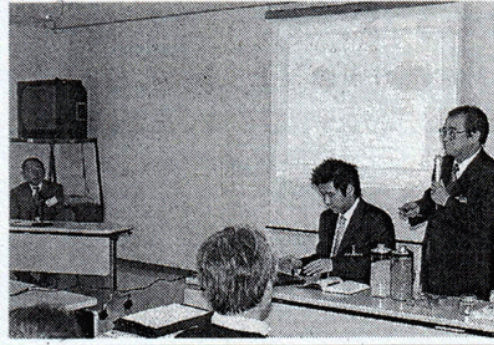
茨城県内のバイオベンチャーや個人が中心となり「つくばバイオマスもみ殻研究会」を二月に発足させる。農家などから出たもみ殻を短期間で分解・肥料化する技術などを共同開発し、事業化の可能性を探る。当初は約二十者が参加する。県内バイオ産業の活性化につなげる。

研究会は県が地域経済活性化のため設けている産学連携組織の一つ「つくばバイオフォーラム」のメンバーが発足させる。十八日につくば市の「つくば研究支援センター」で設立準備会を開き、中垣實三会長（アイオムもみ殻バイオ研究所長）が設立趣旨や活動内容などを説明。参加した約四十人に加盟を呼びかけた。

現時点で加盟する見通しの企業は茨城県内に取引先のあるアイオム（千葉市）、ホームファーム・ジャパン（茨城県つくば市）など。十分な会員数が集まった時点で研究会は「事業化」「共同研究」の分科会を設ける。

もみ殻は機械で粉碎したり、炭化したりして堆肥（たいひ）に再利用されてきた。炭化させるともみ殻の栄養分が損なわれるため、研究会は分解発酵すれば植物育成の上で重要なケイ酸の含有量をほぼ維持できる点に着目。短期間で分解発酵できる技術を開発し、農業

設立準備会を開き、研究会への参加者を募った（18日、つくば市）



も進める。県内をはじめ、産官学が一の新しい研究成果やビジネスの農家から集めたもみ殻を基に、産官学が一の新しい研究成果やビジネス体となってバイオ分野で「ネスチャンス」を探る。

やビジネスに研究成果を活用していく。発酵もみ殻の用途開発などにも取り組む。研究会を通じてつくば市内の研究機関、大学との連携